

---

# H a z e l R i g h t ・ D o l c e S e c o n d

姫神 雛稀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H a z e l R i g h t ・ D o l c e S e c o n d

### 【Nコード】

N 6 2 8 9 T

### 【作者名】

姫神 雛稀

### 【あらすじ】

めでたく高校生になれた、御風くるは（15）。高校選びのポイントは帰国子女の肩書きが使えるかどうか（というのは建前で、本音は片思い続行中の先輩）。 だったはずなのに、いざ入学してみたら突然物凄いイケメン先輩が現れて一目惚れ！  
どうにかして近づこうとして……

泣いて笑って叫んで抱きしめて成長しよう、きっと辿り着けるから

\*自サイト（現在改装縮小中）で公開していたものを手直したものです。

## 第一章(1)

『くるはちゃん、高校でもブラバン続けるよね?』

『はいっ!また遠崎先輩の隣でフルート吹けるように頑張りまっす  
!』

『やる気満々だね!。僕も抜かされないようにしなきゃ』

『ひええっ、そんな、遠崎先輩めっちゃくちゃ上手いじゃないです  
かあっ!尊敬してますようっ』

『……ありがとう。恥ずかしいな』

『ホントのことですっ』

『あはは、そんなに真剣に言われたら本当に照れるな。あ、そっだ  
忘れるとこだった。はい、コレ』

『なんですか?』

『今度の歓迎演奏会の招待状。一番いい席で聴けるよ。部員ひとり  
に一枚ずつ配られてね、僕の分は君にあげるよ』

『……遠崎先輩いっ』

『何、くるはちゃん?』

『大好きですっ!!』

あああっ、間に合わないよおおっ。

せっかく憧れの遠崎先輩が呼んでくれたのにい。

「にやっぴいー……どこお?」

「だから、第一講堂だってば」

「第一講堂おってどれえ?」

「もう、体育館の向かい側の灰色の…迎えに行こっか?」

「いや、大丈夫だけど…っ」

「とにかく早く来なよ?」

「うんっ」

にやっぴいからの電話を切って、駆け出す。

ああん、あと五分しかないのにあたしがいるのは第一講堂から一番遠い南東校舎。

角を勢いよく曲がって　！

「うあっ!?!」

「なっ……………」

ここでまさかの衝突事故!

うわああん、ごめんなさい!

「あつぶねーな……………走るなよ……………つか何でこんなところに……………」  
声的には殿方様だねっ。

謝ろうと顔を上げかけて。

「きゃっ」

なんか更に落ちてきたせいで、前が見えない。

何これっ。

なんてひとりでパニック。  
と。

「おい」

「はひいっ!?!」

低くて渋めのむしろセクシーな声に咎められた。

「お前はここで何してる」

「はへ?」

「うちの部室に入ろうとしてたんじゃねーだろなあ」

「ぶ……………部室?」

疑問符大量発生。

なんとかあたしに被さっていたどうやら新聞紙らしきものの山から顔だけ出すと、かなり近いところに　！

「生憎ここは女子禁制だ」

超美形っ!

睨みつけてる双眸が存在ありまくり、鼻筋なんかすうーって通って……………物凄く綺麗な顔っ!

うちの高校に遠崎先輩より格好いい人がいるなんてっ。

「きゃっ?!」

「またもや奇声。」

「聞こえなかったか?女子禁制だ」

「な、なんかよく分かんないけど女子禁制なんだそっで。」

「てゆうかここ部室棟じゃないよねっ、なのに部室?何部?

でもでもっ、そんなこともうどうでもいいくらいに美形だよっ。」

「もう一度だけ言ってやる……ここは……」

「はわあ、眉間に皺だよ、それでもむしろ格好いいです!

美形って得だね、何しても様になるよ。」

「女子禁制だっつってんだろっが!」

「はわあーっ!?!」

「怒られたっ!?!」

「あんなに格好いい人にだったら怒られたっって損な気分はしないよっ。」

「だけどあたしは反射的に立ち上がって、躓きながらも走り出す。」

「ああーん、もっとあの綺麗な顔を見てたかったよー!」

「じゃあ何で立ち去ったのかった?」

「だってだって……あの人、拳固めてたんだもんっ!」

「いっ、ごめんなさいーっ!」

「遠崎先輩、今日もソロ完璧でしたねっ」

「ありがとう」

「きゃー、遠崎先輩の微笑み最高っ!」

「古臭い形容でよければ、王子様みたい。」

「しかもしかも、先輩ったら頭もすんごくいいんだよっ。」

「どれくらいかって言うと、学年でいつも2番や3番を普通にとるくらい。」

「ねー、凄いでしょっ。」

「くるはっ。良かった、ちゃんとひとりで来れたんだね」  
後ろからいきなり話しかけてきたのは、にやっぴい。

「む……。あたしは方向音痴じゃないよっ」

「嘘ー。ひとりで学校来れないでしょ？」

「そっ……。それは……。確かに……」

だってあれは、人が多すぎて動けないんだもんっ。

「女の子は地図苦手だからねー。いーんじゃない？その内慣れるだろっし」

そこに遠崎先輩のフォロー&さわやかスマイル。

「ところで、にやっぴいちゃんも吹奏楽入るよね？」

「当たり前じゃないですかあ。高校でもバスクラやりますよ。一緒に全国行きましょっね」

にやっぴいが遠崎先輩につこり。

全国つて言ったら全国。

うちの高校で一番有名な部活は間違いなく吹奏楽部。

だって、毎年のように全国コンクールに進んでるんだもん。

あたしも遠崎先輩と全国の舞台でフルート吹きたいんだ。

「そういえば、くるはが持ってるの、何？ 新聞みたいだけど……」

「え？」

うわ、さっきの持ってきてきちゃったんだ。

しかも今の今まで気づかなかったってどんだけ……。ん？

「何……？」

アイザック・ニュートン研究会新入部員募集？

研究”会”なのに部員？ ってそれはどうでもいい。

「アイザック・ニュートン研究会……遠崎先輩、コレは怪しい集団であってますか」

いやいや、にやっぴい、決めつけるのはどうかと……。

「あー、ニュー研ね……うん、怪しいよ、滅茶苦茶。そろそろ生徒会から予算貰えなくなるんじゃないかなあ」

「へ？ 何ですか？」

「だって、活動内容不明だし、毎年のように活動停止食らうくらいの事件起こすし」

「事件……？」

「山中のサバイバルゲームに参加して犯罪すれすれの勝ち方してきたり、他の文化部にいちやもん付けて暴力沙汰になったり、あるうことか他校と揉めて警察の世話になったり……最近は大入りみただけだ」

遠崎先輩、苦笑い。

てゆうか、どうしてそれ未だに廃部になってないんだろう

いや、むしろ廃部にするべきなのは……。

「ま、くるはちゃんはそのなの知らなくていいんだよ。僕と一緒にフルート吹いててくれれば」

遠崎先輩は、そう言っただけであたしの手からチラシを取ると、反対側の手で頭を軽く撫でてくれた。

家に帰って、ご飯を食べて、お風呂に入って……ベッドに潜り込んでおやすみなさあい。

「にしてもお、あの人格好良かったなあ……」

ベッドに寝転んで、日記を書きながらぼんやりそんなことを考えて独り言。

『女子禁制だつってんだろーが！』

あの怒鳴り声は忘れない。

……そんなに怒鳴らなくても。

あーあ、二年生かな、三年生かな？

うう、クラス章の色を見そびれたんだよね……。

そんな余裕はなかったし。

怒鳴られたのはちよつと怖かったけど、逆に言えばラッキー。凄いい偶然だったもんね。

「アイザック・ニュートン研究会……の人なのかなあ」



じゃあ、またあそこに行けば会えるのかな。

「って……ん？」

なんであたしってばこんなに顔が熱……。

も、もももしゃ。

「ヒトメボレ？」

かあっ……。

「……やだあ。名前も知らないのに」

思わず、一人部屋なのに布団にすっぽり頭まで隠れる。

うっ、あれだけで惚れちゃったら完全に面食いじゃん……。

ともあれ。

御風くるは、15年と3ヶ月生きてきて2度目の一目惚れのお相手は名前も知らぬ先輩みたいです……。

「……ってわけだから、真偽のほどを確かめに行くんで、付いてきてよお」

「何、真偽って」

「あの方が研究会の所属かどーか」

「あの方って……あんた、遠崎先輩を今度こそgetするのだから息巻いてたくせに、そんなあっさり鞍替え？」

「ちっち違うもんっ！ 目の保養に行くんだって」

そう、目の保養！

あれはほんとに目の保養！

「遠崎先輩で充分でしょ」

「遠崎先輩より格好いいんだよ？」

もう、オーラがきらきらーって！ 凄かったんだから！

「はいはい、勝手にしなよ」

軽ーくあしらわれたよ……。

「むう……じゃあ、一人で行くもん」

「あ、ちよっとくるはー!？」

うしろで、にやっびいがあたしを呼ぶけど無視！  
あたしは南東校舎へまっしぐら。

そしたらね、素晴らしいタイミングで、あの先輩がいたの。

「……またお前か」

「こここんにちはっ」

ぺこつと頭を下げて挨拶。

はわあ、緊張しすぎだよ。

直視できないです、はい。

意識しちゃうすぎて眩しいです！

「帰れ」

「はにゃあ？」

うあ、変な声出ちゃったよ！

しかも、もう次に続けてやってくる言葉は分かってるんだ。

「女子禁制。分かるだろ」

ほらね。

一回ぐらいじゃあ、諦めないよ。だって恋しちゃったんだもん。

「……でもっ」

「でももへつたくれもない、帰れ」

先輩の目が細くなる。

「……分かりました」

ちえ。

本当はもつと粘りたいんだけど、また怒鳴られたら怖いもんね。

一体何故に女子禁制なのさ。

ああ、女子に生まれなきゃよかったよお。

でも、それじゃあ先輩に恋できないっか。

「あ」

不意に、思い出して振り返る。

「何だ」

「……っ！ さよならですっ」

睨まれちゃったけど目的達成。

先輩の胸に煌めくは黄緑色のクラス章。

よーしっ。

二年生になら恋しても望みはありますっ！

「秀真！ ちょっとお願いがあ　っ!？」

「っ、馬鹿！ 勝手に入ってくんな！」

「っ……ごめんらひゃい」

野球部の部室を開けようとしたら、どうやらちよつど着替え中だったらしく、中からベルトの通ったままのズボンが飛んできた。

ベルトの金具部分が見事にヒットしたおでこを撫でながら、部室の入り口の横にそつともたれて、秀真を待つ。

帆足秀真。

同い年で、あたしの従兄弟にあたる。

一言で言つと野球馬鹿。

ちなみにそこそ格好いいし、うちの高校来てるぐらいには頭もいいし、野球部でもエースピッチャーだったしでかなりモテるみたいだけど、あたしは興味なし。

従兄弟は一応、恋愛対象にはできないけど、秀真は無いなあ。あたしと同じくらいの期間は海外にいたはずなのに、いつの間にやら英語がカタカナ発音になつちやつて、受験前に慌ててあたしのところに来て、発音のレッスンを付けてもらったという間抜けな帰国子女。

しかも、三ツ星レストランのチーフシェフの息子だったのに、じやがいも一つも剥けやしないし。

生活力無さすぎっ！

やっぱり自分よりは特技多い人の方がいいと思うんだよねえ。

秀真もたまに一人暮らし化するけど、その度にうちに来てあたし

に世話を焼かせるしさあ。

あんたの脱ぎ散らかしになんか触れたくないんだからねっ。

今も何故か脱ぎたてのズボン手に持つてるけど、ものすごく不愉快なんだからねっ。

てゆーか、あたしが寝てる部屋にこっそり入ってきて、寝顔を写めるの本当にやめてよねっ。

「くるは、何？」

小声で、どうやら着替え終えたらしい秀真が声をかけてくる。

中学の時の学ランと、真新しいユニフォームと、どっちが似合うかって聞かれたら三秒悩んで中学の時のユニフォームかな。

高校のはまだ着られてる感がある。  
で。

「制服、貸してっ」

「……は？」

当然のごとく退かれました。

が、こんなことで諦めるほどにあたしは弱くないよっ。

「いいからっ、野球部の練習終わるまでには絶対返すし、別に変なことに使うんじゃないからねっ」

「いやいや……制服貸せて……お前女子だろ、なんで男もんが要るんだよ？」

う。

「な、何でもいいでしょっ。ほら、早くっ」

「分かったって。分かったからあんまり目立つ動きするなよな……ほらまた有りもしない噂が……」

「何よ？」

「できてるできてないってな。……ほら、貸すからどっかに消えてくれ」

「でき……」

「冗談じゃないっ。」

秀真なんかと付き合ってるなんて噂、もう絶対立たせないんだか

らっ。

「あ、秀真、あんた今日も伊達眼鏡持ってる？」

「ダメ？ あるけど……貸せてか？」

「うん」

「はあ……。ほらよ」

「Merci」

「Niente problema……うあつ、先輩ら来るっ。どつか行けるは」

「言われなくても行くよ。ありがとねっ」

そうして秀真から借りてきた男子制服を抱えて次の行動へ移……  
ってはみたもの。

「……あいつ何気に背、高いんだ……」

ズボンが余ります……。

女子トイレで着替えたものか男子トイレで着替えたものか、さんざん迷って結局、まだ男子トイレの方がトラブルの規模が小さいよ  
うな気がして、勇気を出して入り込み、そこで着てはみたもの。

うう、身長154.3センチの身に、高校生男子の制服は無理が  
有りすぎたかあ……。

もうちよつと身長欲しいなあ。

「しかもブレザーも肩合わないし」

というかベルトの穴がないですっ。

「……その上ネクタイ結べないよお」

なんだかあたしには長すぎます。

うーん。秀真に借りるんじゃないかなあ。

でも、男子の知り合いの中じゃ秀真がまだ一番小柄な方だし、そ  
れに秀真以外の男子の制服は……ちよつと抵抗あるよね。

いや、秀真のだってもちろん抵抗あるんだけど。

不満は多いながらもどうにかこうにか着替えて、体育用のスニ

カーに履き替えて、伊達眼鏡装着。

ちよつと布地が余ってる感あるけど、まあ成長期見越して大きめのサイズにしてみたつてので通そう。うん。

邪魔っけな髪はラフにまとめて上手いことブレザーの中に入れ込んで。

いざ、出陣！

あの場所には、よく見るとささやかな看板がかかったドアがあった。

古びた木の板に毛筆で書いてあるくせに、その文字はアルファベツト。

なにはともあれ、ここが出入り口に違いないね。

「こんにちは、アイザック・ニュートン研究会はここですよね？  
見学したいんですが」

よし。完璧っ。

どっから見ても、チビな眼鏡くん。

台詞も覚えた。

大まかな作戦はこう。

とりあえず男子の格好して話をするところまでこぎつける。

話をするうちにつまいこと使える情報を聞き出して、次は女子の格好で再挑戦！

そのためにもこれからの第一段階はすーっごく大事！  
いざっ。

「何してんだ？」

ドアをノックしようとして振り返った

心なしか遠慮気味に聞こえるセクシーバリトン。

ひゅわっ、計画があっ。

「あ、あのっ、アイザック・ニュートン研究会はここですよね？

け、け見学……」

「おいちょっと待て……お前、ついにやっちゃったのか」  
遮られた上に頭を抱えられましたけどっ!？」

「……まさか、わざわざ男のカッコしてまでやってくる馬鹿がいるとは、さすがに考えなかつたな」

早くもバレてるう!？」

「しかも制服を提供する男も変わってるよな……俺だったら上着一枚も安直には貸さないけどな」

はへ……。

呆れられました。

「あの……」

こつちがどうか取り繕おうと声を出しかけたその横で、先輩はそのまま最寄りのドアをopen。

「入れよ。そんなんでも追い返したら、俺が悪者みたいだ」

え？

「ほら、いつまでアホ面晒してる。入らないなら閉めるぞ」

は、入ります入ります、入りますうっ!

## 第一章(2)

中に入ったあたしは、思わず部屋中を見まわした。

「ふあ……」

色んな物が有りすぎて飽きないっ！

壁を覆い尽くすほどの棚にぎっしり詰まった実験器具。

理科室お馴染み、人体模型。

古めかしい本が乱雑に積まれた一角。

小難しそうな公式やら化学式がごちゃつく黒板。

一旦、さらに奥の部屋に入って、それから出てきた先輩が、突っ立ったまま気圧されてるあたしに言う。

「その辺座れ。あと眼鏡外せ、似合ってない」

「はいっ……」

似合ってないんだ……。

さらっと言われた……。

うう。なんか哀しいよう。

「まず言つとくべきことを一気に言うから。……あ、なんかそっちから聞きたいことは？」

ぐいと首をひねりながら、先輩はあたしに聞く。

「えと……今の部長さんは……」

「俺だ」

言つて部長先輩は、机を挟んであたしの真ん前に座った。

近いよお、格好良いよお。

二年生で部長かあ。凄いなあ。

「ちなみに俺は鞘原郁都と言う。2年8組だ」

8組……すなわち理系選抜クラス！

理系選抜！

あの、何故か見目麗しいお方ばかりが受かるといふ噂の理系選抜！  
んまあ実際入ってみたら、8組だからってそんなに格好いい人も



いなくて、噂だけかと思つてたけど確かにいたんだねっ。

そして鞆原郁都先輩！

なんか名前まで格好いい！

「あ、あたしは御風くるはです」

「8組か？」

「はへ？」

「理系かつて聞いてんだ」

ままさか。

唯一あたしが楽できそうな語学選抜クラスですから。

しかも帰国子女の肩書きで受かったようなものだから。

……あたし、そんなに偏差値高くないですよ……？

「な……7組です」

「……外語かよ……ちえ」

鞆原先輩が舌打ち。

……なんかごめんなさい。

「んーまー……やる気は……あるんだよな。そこまでするわけだし」

「はいっ！」

まさか『いや、先輩目当てで』なんて言えないしっ。

「でも女なんだよなあ……。あ……。まあ……。仕方ない……。か。

廃部になるよりは……。でもなあ……。女子……。うー……」

ひとり唸る鞆原先輩。

「なあ御風」

「は、はい！」

名前呼ばれちゃったよお。いきなり呼び捨て。きや。

「最初に言つとくが、俺は女は大嫌いだからな」

……へ？

「お前は自分の意志でここに来たんだ。なら、部長である俺に合わ

せるのが当然だ。だから女の面倒くさい部分は一切俺に見せるな」

「面倒くさい部分……？」

「主に恋愛」

……恋愛？

「あと、人間関係の愚痴は絶対聞かないし、ひとりで行動できない奴も却下。言うまでもないとは思うが恋愛相談なんて言語道断」

……マジ？

「でも先輩も恋はするでしょ？」

てゆか、してるでしょ。

むしろ彼女くらい普通にいるでしょ。

「するかよ、んなもん」

先輩はさらーつと言って、立ち上がり、壁際の棚を何やらごそごそ。

「なんでですか？」

「なんでって……… 必要ないから」

必要ないから………。

って、勿体無いっ！

せつかく美形なのに………。

だって先輩なら、どう考えたって女の子選び放題でしょー！？

絶対、バレンタインは熾烈だよ！？

「御風、いきなりだがテストだ」

「せんぱっ……… はひい？ テスト？」

先輩、やっぱり恋はしとかないと。と言いかけたんだけど。

様子見て、手始めにあたしとかどうです？ いやいや、言い過ぎ

いー！きゃあ。

「制限時間15分。出来る限り埋める」

もちろんあたしが本当に言えるはずもなく、先輩は気付かずに話を続ける。

んで、机に叩きつけられたのは一枚の藁半紙。

先輩は右手首の時計に注目。

「いくぞ。よーい……」

「んにゃ、待ってえ……… えんぴつえんぴつっ！？」

無いようー！？

「うるさいな……これ使え。よし、よーい、はじめ」

焦って表を返して、絶句。

「ナニコレ……？」

「時間なくなるぞ」

分かってます。

けど……ナニコレ……？」

とりあえずあたしには理解不能な単語しか書いてない。

「……せんばい」

「なんだ？」

「……これ……何すればいいんですかあ？」

泣けてくるよう。

「はあ？ 解けばいいに決まってんだろ」

「どうやって？」

「……まさかさっぱり分からないのか？」

半泣きで頷くと、先輩は呆れた溜息。

「あーもー。分かったから！ そうだよな、外語組にはレベル高いよ

な。分かったから……泣くなよ！」

「だって、全然分かんない……」

「あーもう、これだから女は……」

あーっと、よく似合う髪型を左手で掻き回して、先輩は苛々。

「どうしたらいいんですかあ、こんなの分かんないですっ……」

「うるせえよ！ 何で泣くかな……」

「だって……先輩がテストって言うから……出来ないし……そした

ら

先輩、あたしのこと入れてくれないでしょ？

「……馬鹿か。俺も焦ってるから女子でも仕方なく入れるんだよ。

……緊急事態みたいなもんだし。どんだけ馬鹿だろうと、俺が鍛え

てやるから。あと参考までに、それは俺が受けた入試問題の一部だ。

オーソドックスな7組には難しい。そのうち分かるようになるから

心配するな」

「……じゃあ、中学の理科が2でも大丈夫ですか？」

「……2か……。リアルに平均以下だな。というか、そんなんでよくうちの高校入れたな」

だから帰国子女特権です！

「まあいい。……実はさ、うちは今年部員が零だと存続の危機なんだよ。だから、その辺は俺がどうかしてやる……とりあえず、今のお前の状態は分かった。あ、なんか入る前提で喋っちまったが、入ってくれるんだよね？」

「え？ はいっ！ もちろんです！」

半分独り言に慌てて返事。

「よし……これで今年も安泰だ」

「……っ！」

「……何？」

「なな、何でもないですっ」

思わず漏れそうになった声を必死で留める。

先輩、笑顔ヤバイよう！

鞘原先輩に比べたら、遠崎先輩なんて目じゃないよ！？

遠崎先輩が王子様の笑顔なら、鞘原先輩は……あう、なんだろっ……

…。

日本語には、この素晴らしさを表す単語がないような気がする。

「ま……とりあえず返してこいよ」

「何をですか？」

「その服。どうせどっかの運動部員のだろ？」

あ、忘れてた。

ポケットのケータイによれば、そろそろヤバイ時間。

「か、返してきますっ」

立ち上がって、ぺこっと頭を下げる。

秀真に怒られる！

「えっと、よろしくお願ひしますっ！ それじゃあ、今日はさよならですっ」

「……えらく慌てて。面白い奴だな、お前。明日もちゃんと来いよ」  
「はいつ！」  
なんかよく分かんないけど結果オーライ。  
一気に距離が縮まりました……！

次の日。

「くるは、あんた何で昨日来なかったの!？」  
朝一番に、にやっぴいに怒鳴られた。

「ごめん、にやっぴい……」

「信じらんないよつ。遠崎先輩、凄く淋しそうだったんだからねっ」  
「！」

あ、遠崎先輩。

まだ言っていないんだよね……だから、言わなきゃ。  
今言わなきゃ！

「……あのね、にやっぴい。あたし、吹奏楽には入らないことにしたの」

一息で言い切った。

「はあっ!？」

にやっぴいの当たり前のリアクション。

「ニュー研に入るから」

「ニュー……研? なんで? あの先輩がそんなに良かったの!？」  
にやっぴいがあたしを見つめる。

「あたしが入らないと、廃部になるんだって」

「……ふうん、あつそ。あんたってそんな奴なんだ。知らなかったよ。あんなにたくさん面倒見てもらったのに遠崎先輩を裏切れるんだ。遠崎先輩が哀しんでも平気なんだ?」

にやっぴいの目が冷たい……。

面倒見てもらった……か。

確かに。確かに、戸惑うあたしを優しく導いてくれたのは遠崎先

輩だけだ。

裏切るわけじゃないの。

裏切るのとは……。

「違う」

「いや。私が言つといてあげるから」

言い切れなかった。

「にやっぴい！」

にやっぴいは待つてくれなかった。

多分にやっぴいは、遠崎先輩を好きじゃなくなったなんておかしいって思ってる。

でも鞘原先輩を知ってしまった今となつては、もう遠崎先輩にはときめかないの。

鞘原先輩のまとう雰囲気、虜になつてしまつたみたい。

「……こんにちわ」

「はあ？ ……ああ、御風か。慣れねーな……」

テンション地下に埋もれ気味に部室に入ると、鞘原先輩が持つてた試験管立てを落としかけた。

「おい、なんか暗いぞ。こつちまでしんどいからどうにかしろ」  
ちよつと無茶です。

ふらりと机に辿り着いて、突つ伏す。

うわーん、泣きたいよう。

にやっぴいにも遠崎先輩にも嫌われたよう。

「どうした？」

「どうもしないです……」

「そうか。で？ 昨日は間に合つたのか？」

「なんとか……」

光速で着替えて、野球部室に放り込んで三分後、野球部お帰りなさいの素晴らしいタイミングだったの。

まあ、帰り道一緒になつた秀真に、一体何に使つたんだと聞かれ

たけど、スルー。

秀真はその辺分かってくれるんだよ。さすが従兄弟、伊達に血は繋がってないね。

で。忙しなく動く先輩にお構いなしにひとりでうだうだしてたら、ついに部長の雷が墜落。

「御風っ！ 何があつたのかは知らないが、しんどいなら家で寝ろ！ 目障りだ！」

「ひっ!？」

耳元で激怒されて、体を起こす。

ひええ、先輩怖い……。

「聞いてんのかっ!？」

何も言えずにいたら、また怒られたよう。

「……ひっ……えくっ……」

もうどーしたらいいのかわかんないっ！

勝手に泣けてくるし。

先輩に泣き顔見られたくなくて、またうつ伏せる。

「ちょ……泣くなよ。ったく、これだから女は……。ほら、ハンカチ貸してやるから……。ちょっときつく言い過ぎたか？ あーもう……」

先輩がポケットから紺色のハンカチを渡してくれる。

無理矢理右手に握らされても、鞘原先輩のハンカチなんて緊張して使えないよう。

「俺のせいかな？それとも……」

「……先輩のせいじゃないです」

「じゃあ何だ。物でも失くしたか？」

「違います……」

なんかよく分かんないけど、先輩は相談事駄目だつて言うから、泣きついたりなんて出来ないし。

「……あー分かった。今日だけだ。何でも話せ、聞いてやる」

あたしの前の椅子に座り、あぐらをかいて、先輩は腕組み。

「へ？」

「喋れよ。聞くから。誰に何されたんだ」

「面倒くさそうに、でも、ちょっと……照れてません!？」

「ともかく、話して、話したよ。」

「全部。」

「だって、先輩ってば全く目線逸らさないばかりか、相槌すら打たずにひたすら聞き役なんだもん。」

「話し終わりが掴めないよ。」

「まるでドイツの人と喋ってるみたいな。」

「そういえば、先輩って少しハーフっぽいかも。」

「……まさかね。」

「……なるほどな。…んまあ、音楽は大変だよな」

「一段落して、あたしがくすんと言ったあとで先輩は言った。」

「今お前は、ブラバンに入るかニュー研に入るかで迷う羽目に陥ったと」

「はい……」

「うう、なんか鞘原先輩に言われちゃうと罪悪感が。」

「次の一言は驚きの連続へのスタートだった。」

「で、そのフルートの先輩ってのはもしかして遠崎か？」

「はへ？知ってるんですかあ？」

「てことは、やっぱりそうなのか。んだよ、それを先に言えよ。それなら話は簡単だ。ブラバンなんか入るんじゃない、ニュー研に入れ」

「……鞘原先輩って、遠崎先輩と仲悪いんですか？」

「仲悪いどころの騒ぎじゃねえよっ。遠崎……ああ、名前だけでも腹が立つっ」

「びっくりした。」

「鞘原先輩が立ち上がったかと思いきや、いきなりその辺のパイプ椅子を蹴りだしてっ！」

「でも遠崎先輩、いい人ですよ？ 優しいし」



「いい人？ 遠崎が？ …… 何言っただ御風。あいつなんかへらへらしてるだけじゃねえか」

「うう、相当怒ってます……。」

「だって、あたしのことよく構ってくれたし……遠崎先輩てば、頭もいいから、勉強も見てくれたんですよう」

「それだ、俺はそれが苛つくんだよつ。たいして何にもできねえくせに自分はすげえんだって顔しやがってよつ」

先輩は、何かあたしも知らない言葉で低く呟いた。

あんまりいい意味じゃないんだろうなってことは分かる。

「何かあつたんですか？」

「何かも何も……」

「いやいや、あたしを睨まないでくださいよつ。」

まあ、その方が余計格好いい度が増すのも事実なんだけど。

「とりあえず、座ってくださいよ先輩」

「ああ……分かった。御風は悪くないもんな、すまん」

先輩はそう溜息をつくとき、元の椅子に座りなおした。

「……で、鞆原先輩は遠崎先輩の事を知ってる……んですよね？」

「知ってるつつつか……俺が一番嫌いな男だ」

「吐き捨てるように言う鞆原先輩。」

「嫌いつて」

「あいつさあ、なんだかんだとすぐ自慢するだろ？ ……こっちが

腹立つことをわざと言っし……性格最悪だろ」

「そんな人じゃないですけど……」

「遠崎恭平だろ？」

「はい……」

遠崎つつたらあいつしかいねーや、と続けて。

「一年の時にあいつ、模試が良かったらしくてよ、わざわざ俺に言いに来たんだ。『鞆原はどうだった？』って」

「そりゃ、8組の成績は気になるんじゃないですか？ ほら、遠崎先輩は文系選抜の6組ですし。文系と理系は仲が悪いつて聞きました

たよ」

「それはいくらなんでもガセだろうが……。さあな。どっちにしろ、俺の方が良くてさ。逆に自慢してやったら、あいつ『まあ、鞆原は部活暇だもんね。当たり前か』だと。なめてやんの」

鞆原先輩の方が良かったんだ…。

「あいついつも2、3位でうるちよろしてるくせに国語は勝つただとか色々言ってくるんだよな」

「……でも、遠崎先輩は賢いじゃないですか。鞆原先輩にそのこと色々言う権利とかあるんですか？ほんとに成績いいなら別に……。いくら鞆原先輩でも、それ以上言うなら…。

「あんな、俺の方があいつより上なの」

鞆原先輩は腕を組み替えた。

「え…？」

「なんだよ、その反応。俺がトツプじゃ悪いのか？」

マジで!？」

なに、鞆原先輩って顔も頭も良いの!？」

「そう……なんですか」

「ああまあな。あと噂によれば、遠崎の元カノが遠崎を振って俺に告ったのが気に入らなかつたらしい」

「告られたんですか!？」

「二秒で振ったけどな」

早い!

しかも遠崎先輩の元カノっていえば、かなりの美人だよ？

……あたしはその人がいたから振られたんだけどね。

「あー何の話だ……ああ、そう。とにかく遠崎のことをお前が好きなのはよく分かったが、あいつはやめとけ。ろくでもない奴だからん……?」

今なんて……って、えー!？」

「なっ! 別に好きじゃないですっ!」

「はいはい。分かりやすいんだから。まあ、早いところ諦める。そ

の気にさせて付き合ったところで損しかしねーだろうから」

先輩は立ち上がって伸び。

「違いますー！ あたしが好きなのは、さ」

首をぽきぽき鳴らすのを途中で止めた先輩。

「……………さ？」

「な、何でもないです！」

あああっ！

なんか誤解されてる！ やだやだ、だって今あたしが好きなのは……………。

鞘原郁都先輩、あなただけなんですよ？

## 第一章(3)

その帰り道。

今日はただでさえ七時限目まであったから、あたしの話を聞いてもらってたらもう七時近くになっちゃった。

「何もできなかったな、今日は」

「すみません……」

「あ？ 別に気にすんなって。俺だって今までひとりでやってたから、何したもんか分かってない部分あるし」

「でも……」

「うるさい。それ以上ぐだぐだ言うな、面倒くさい」

うあ、そう止めますか。

鞘原先輩の半歩後ろを歩く。

背の高い先輩の歩幅はあたしより断然大きくて。もちろん、先輩はあたしに合わせて歩いてくれるわけがなく、ちよつど小走りくらいの速さでついてゆく。

先輩は時々前髪を払いながら、特に何を言うでもなくひたすら歩く。

だからひたすらついてゆくの。

「……御風？」

「はいっ」

突然名前を呼ばれて、先輩の横顔に見蕩れていたあたしはびっくり。

「お前、駅こつちで良かったのか？」

「え、こつちJRですよね？」

多分。

「JRでいいんだな？」

「はい。先輩もですか？」

「ああ。上りだ」

「ひえ、一緒ですー！」

「え、マジ？」

うっはあ、偶然だっ！ やった。

「ちなみにあたしは普通で五つ目です」

「……俺もだ」

「え？」

それは……つまり。

「行き帰りが同じらしいな」

……！

やだ、運命を感じる。

だってそうでしょ、鞘原先輩とご近所なんだよ！

って、うん？

「でも、先輩とは中学一緒じゃなかった……」

「中学は違うな」

「もしや私学ですか？」

「いや、大阪の公立」さらり、と言って繋げて。「高校受けるときに引越したから」

つまり、大阪人。

「あれ、でも先輩。大阪弁じゃないんですね」

「俺は、生まれまでまるきり大阪なわけじゃないからな」

「そうなんですか？」

「ああ……。で、お前はどことこのハーフだ？」

「はえ？」

いきなり、そんなことを聞いてくる先輩。

「ん、純粋な日本人ではないだろ？」

「ん……」

何でバレたかなあ。

「ちなみに、根拠としては」根拠としては？「発音と言い回しが不自然」

不自然って言われた！地味にシヨック！

うーん、そりゃ日本語はあたしにとっっちゃ第二外国語なんだもん、

難しいよう。

「で、どのの？」

「フランスです」

父親は日本人、母親はフランス人。生まれは東京、育ちはカンヌ。

「へえ。母語はフランス語か？」

「はい。ちなみに、次は英語で日本語はその次です」

「……それでそんだけ喋れるんなら大したもんだ」

あたしには語学しかないからね。

ほんとは更にイタリア語とスペイン語も分かるんだけど、それは黙つとこう。

これしか特技ないんだもん。

駅に着いて、改札を抜けてホームへ。

人が多くてあたしは埋もれちゃうけど、鞘原先輩は背が高い分すぐ見つかる。

「御風、お前別に無理してついでこなくてもいいのに」

「だって先輩と一緒に帰りたいですよ」

呆れ顔の鞘原先輩を見上げて、言う。

「変なヤツだな」

「いいもんいいもん。」

「あ、電車来ましたね」

この時間は満員。

開いたドアのはじっこからするつと入って、ドア裏のスペース確保。

えへへ、ちっちゃいとこつという時便利だね。

180ちよいは余裕であると思われる鞘原先輩は、人混みのせいで今度は逆に手間取って吊革に手を掛ける。

「小柄だと楽そうだな」

「楽々ですよ」

「いいよなー」と呟く先輩。

なんだか何でも軽々こなしそうで、とても一個上には見えない先

輩も、そんなこと言うんだって思った。

「ええと、先輩、パン屋さん寄ってもいいですか？」

「パン屋？」

「いつつも、あたしが次の日の朝ご飯用にパン買いに行くから、帰りに寄つとくと、おじさんが……あれ？」

なんか文章おかしくなっちゃったな。

「大体分かったからいい。行くぞ」

んー、もつと日本語勉強しなきゃ駄目だ。

先輩の歩幅は大きい。

ちゃんと付いていかなきゃ、すぐに置いてかれちゃうよ。

改札を出たところで7時半をまわっていて、この辺は住宅街で人氣が無いもんだから、先輩が家まで送ってくれるって言うんだ。

『お前放つとくと迷子になりそうだからな』  
つてさ。

でもね、さすがに地元で迷子にはならない……はず。

とにかく、超いい人！

んまあ、確実に馬鹿認識されちゃってるんだけど、それは仕方ない。

事実お馬鹿だし。

「つて、先輩、どこのお店が知らないでしょ!？」

さくさく歩いてますけど。

「Boulangerie Verlainneだろ？」

「ひえ？ 何で分かったんですか？」

簡単だ、と始めて。

「まず、御風の母語がフランス語、日本語が第二外国語であることから、主たる生活はフランスで営んだはず。父母のどちらかはフランスの文化に育ったわけで、日本に来たからと言っていきなりフランスの味を忘れるわけにもいかない。結果、毎日わざわざ朝食

のパンを調達するくらいに鼻屑にする店はおそらくフランスの味を限りなく残した店。御風が学校帰りに寄れる範囲に絞れば該当するのは一軒、Boulangerie Verlainéだ。quod erat demonstrandum QEDと

「……それ、さっきの瞬間で考えたんですか!? 凄い!」

拍手ものだよ、これは!

「まあ、これは後付けで、確証は部室で見えたお前の鞆の中身のパン屋の袋だが」

「ひえ、鞆の中とか見ないでくださいよっ」

もつと綺麗に入れとくんだった!

「悪い悪い。見えちゃったものは仕方ないだろ」

「んまあ……さっきの説明格好良かったからいいです」

「訳分かんねえよそれ。あんなの単なる格好付けみたいになって……」

「大丈夫ですよ、鞆原先輩格好いいですから、格好つけても嫌味じゃないですから」

「またそんな冗談を……」

「冗談なんかじゃないですよっ!」

叫んじゃったら、先輩が横を向いてあたしと目があつた。

「……戯言、言ってるじゃねえよ」

ほん、と頭を軽くたたかれて咄嗟に目を瞑ってる間に、先輩は先々歩いていつちゃった。

「にやにや、待ってくださいよう」

慌てて追いかける。

にしても……。

戯言ってどゆ意味?

「Bonjour! Excusez-moi. Je suis en retard」



「Bonjour, Kuruha. C'est pas gr  
ave.」

あたしが母語を忘れずに済む秘密はここに。

いきなりのフランス語にちよっぴり戸惑う感じの先輩。

パン屋のおじさんたら、純粋なパリっ子なのに超日本語上手いんだよ。

「はい、くるはちゃん、いつものやつね。あと、このスフレ入れとくね。夕方に作ったから明日のランチにでもどうぞ」

「うわ、ありがとう。おいしそうー」

いつものバゲットの隣に、おじさんがおまけをくれた。

売れ残りなんだろうけど嬉しいな。

「はい、300円ね」

「はいはい」

鞆を開けかけて、先輩にみられやしないかと焦る。

けど、先輩はドアからも離れずに、入り口の傘立ての横で腕を組んで立っていた。

「えっと、100えん……」

「ねえ、くるはちゃん」

おじさんが話しかけてくる。

「何？」

「入り口にいる、格好いい男の子、くるはちゃんの彼氏？」

「ち、違うよー」

いきなり何言うかと思ったら。

ええと、200円……。

「ああそうだ、くるはちゃんは恭平くんを追っかけて高校選んだんだっけ。じゃあ恭平くん以外の子と付き合ったりはしないか」

300円が床に散らばった。

「あ……ごめん、なんかデリカシーないこと言っちゃったかな？」

「いや……」

そっいうんじゃないんだけど……なんて言うか……。

「深く問いつめたりはしないよ。そんな無粋なことは性に合わないからね」

困っていたら、おじさんがそう言ってくれた。

「だからさ、そんなこの世の終わりみたいなお表情するのはやめようよ」

あ……またやっちゃった。

あたしってば単純だから、何でもすぐ顔に出ちゃうんだよね……。

「ほんとに困った時はいつでもおいで。力になるよ」

「……うん。ありがとう」

パン屋さんから家までは緩やかな坂道。

カバンを肩に掛けて、パン屋さんの袋を抱えて、先輩の横をてくてく。

「こつち……東らへんであんまり来たことねえけど、結構いいところだな」

「でしょう？ 先輩は西側ですか？」

「あ、うん。……あんまり治安のいいところじゃないな、あの辺は」

「へ？」

「あ……気にするな。それより、まだなのかな？ えらく上だな」

「もうすぐです。ほらあれ、あの煉瓦調の」

お母さんの趣味で、やたらメルヘンチックなんだよね、うち。

「はん……しかし、あの家が浮かかない程度に周りもファンタジーだな」

「ですかねー」

まあ、お向かいさんは螺旋階段だしね……。

「んじゃ、まあ、また明日な」

「はい、ありがとうございしました！ あ。せ、先輩！」

あたしの言葉も聞かず引き返しそうな先輩を呼び止める。

「メアド、教えてくださいっ！」

緊張するっ。

けど言えた！

「あー……そうだな、要るよな」

ポケットからケータイを取り出して、何だかぎこちなさそうにカコカコ操作して。

「じゃあ、俺が送るわ」

「はいっ」

受信、受信。

「次、あたしから」

「いや、俺のやつ受ける機能壊れてるからメールで送ってきてくれ」

「へ？」

「赤外線、送ることしかできないんだ」

え。まじですか。

買いかえればいいのに……。

「じゃあ、あとで送るときますね」

「悪いな」

先輩はそうケータイを仕舞った。

わーい。先輩のアドゲット！

「ああ、そうだ。俺はもう帰るが……」

「何ですか？」

「戸締まりは厳重にしろ。リビングの電気くらいは点けっぱなしで寝てもいい。おかしいと思ったら迷わず誰かに連絡しろ、俺でも構わない。いいな？」

まくしたてる先輩は、ちょっと勢い余ってあたしに近付いてきた。や、もう。

何でこんなに格好いいの!?

「聞いているか、御風？」

「はにゃ？」

「……まったく……まとめなおして言うとな。要は、一人暮らしなんだったらそれらしく危なくないようにしとけてことだ。分

かったな？ じゃ」

……何で先輩、あたしが一人暮らしって知ってるの？  
聞く間もなく、先輩は坂道を軽快に下っていった。

夕食を作って、食べて片付け……たと思っただけどな……やっぱ  
りあれが気になって覚えてない。

「何でバレたのー？」

溜息が湯船の表面に波紋を作る。

あたしの疑問が浴室に響いても、まさか解決するわけがなくて。

「むう……」

さっき思い切って、アドレス送りがてら聞いてみたけど返信こ  
ないし……。

そうそう、鞘原先輩からメールが来たらすぐ分かるように他の人  
とは着メロ変えたんだ。

そんなこと、機械に疎いあたしがしたの、にやっぴい以来だよ。

……。

「にやっぴ……」

そっだよ……喧嘩したまんまだった。

思い出して、入浴剤で白く濁った湯に沈んでみる。

……うん、今週中に、話しにいこう。ちゃんと言おう。

もう昔のあたしじゃないんだ、しっかり自分で自分の言葉で気持  
ちも伝えられる。

あたしはあたしの思った通りに動くよ。

「……C a v a !」

そしてちょうどその時、リビングで鞆原先輩ソングが鳴ったのを聞いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6289t/>

---

H a z e l   R i g h t ・ D o l c e   S e c o n d

2011年5月31日21時10分発行